

哲学教育ワークショップ

高等教育における哲学教育の意義と方法

——一般教育・教養教育に焦点を当てて——

望月太郎(大阪大学)

哲学教育ワークショップでは、今回は高等教育における哲学教育について主題的に考えてみたい。これまでさまざまなテーマに取り組んできたが、就中、高等学校における哲学教育に関するテーマがもっとも多かった。次いで、小・中学校における哲学教育、そして市民社会における哲学対話をテーマとして取り組んできた。高等教育における哲学教育については批判的思考教育と絡めて考えてみたことはあるが、本格的にワークショップの主題として取りあげたことはない。

高等教育における哲学教育といえば、哲学を専攻する学生に対する専門教育と、哲学以外を専攻する学生に対する一般教育ないし教養教育とに大別されよう。今回は後者に焦点を当てる。専門教育としての哲学教育よりも、一般教育・教養教育としての哲学教育に携わる哲学の専門家のほうが多いであろうし、また、特に若い哲学研究者の場合、一般教育・教養教育を担当することから教員としての経歴を始めるケースが多いであろうからである。そうした状況も踏まえて、哲学教育の意義のみならず具体的な方法についても考えたい。

まずは三人の提題者に、各人の教育経験に即して哲学教育の意義と方法について話題を提供していただき、それをもとにフロアを交えた対話に入る。ワークショップという場を活かして、できるだけ多くの人々が対話に参加し、共に考えられるようにしたい。そうして考えられたことは、おのずから学校教育の他の場面——哲学の専門教育、他分野の専門教育、また社会教育のさまざまな場面——で応用され得ると期待している。

提題の概要は、以下の通りである。

パームクィスト, スティーヴン (Stephen Palmquist 香港バプテテスト大学)

「Teaching Philosophy to Non-Majors: Twelve Words to Guide the Way (哲学を専攻しない学生に哲学を教える——道を示す十二の言葉)」

まず哲学を定義することの難しさを振り返り、哲学を定義するもっとも包括的な方法は、それを自己定義的な学と見なすことだと主張する。このように定義することの意義を考察した後、「西洋的な」方法と「東洋的な」方法を総合して、哲学の初心者たちを哲学的な自覚の小路へと導く、提題者の取り組みを簡単に紹介する。哲学を一語で表現される四つの領域に区分し、それぞれの領域が二語で表現される目標を追求するものであることを示す。その結果、現れる哲学の「道」は、形而上学—無知を承認する (metaphysics, recognizing ignorance)、論理学—言葉を理解する (logic, understanding words)、科学—知恵を愛する (science, loving wisdom)、存在論—静かな驚異 (ontology, silent wonder) である。

土屋陽介 (Yohsuke Tsuchiya 開智日本橋学園中学・高等学校／開智国際大学)

「子どもの哲学 (哲学対話) の手法を取り入れた大学での哲学教育の可能性」

提題者は、1970年代にアメリカで開発された「子どもの哲学」(Philosophy for / with Children) と呼ばれる哲学対話教育の実践者・研究者として、首都圏の私立中高一貫校の「道徳科」の授業をメインフィールドに哲学対話をを用いた教育活動を行っている。本提題では、提題者の中高一貫校での哲学対話教育実践者としての経験を踏まえて、子どもの哲学の手法を取り入れた大学での哲学教育の可能性について具体的な提案を行う。提題者がこれまでいくつか担当してきた大学での哲学系科目の授業の方法も紹介しつつ、特に受講者数がしばしば多くなりがちな「一般教養」の哲学系科目の授業において、子どもの哲学のエッセンスを取り入れた授業づくりがいかんにして可能かについて検討する。

佐金武 (Takeshi Sakon 大阪市立大学)

「思考の技術と哲学の教育的意義」

哲学を学ぶことにどのような教育的意義があるだろうか。論理的思考やクリティカル・シンキングなど、哲学者が得意とする思考法はこれまで度々取り上げられてきた。また近年、高等教育においてはジェネリック・スキルと呼ばれる汎用的能力が着目され、そのなかで哲学の教育的意義が見直されつつある。本提題では、これらの知見も踏まえつつ、広義の「哲学的思考」を身につけることの意義について、自らの教育実践に基づき一定の考えを示したい。

なお、司会は、望月太郎 (Taro Mochizuki 大阪大学) が務める。